2016.3.21

神の「いつくしみ」

–教皇フランシスコとリジューの聖テレーズ–

片山はるひ（ノートルダム・ド・ヴィ）

１．神の「いつくしみ」と「あわれみ」＜神の「愛」をあらわす二つの言葉＞

◎「あわれみ」ヘブライ語（ラハミーム）→ラテン語（Misericordia）：母胎や「はらわた」を指す言葉で、母親が自分のおなかを痛めたこどもをいとおしむ情を意味する。苦しむ人、悲しむ人を見て深く心を動かされる憐憫の情。
＜ギリシャ語　スプランクニゾマイ（スプランクノン：はらわた）イエスの憐れみ＞
神のみに使われる言葉。訳例　「断腸の思いで」、「胸も張り裂けん思いで」

◎「いつくしみ」ヘブライ語（ヘセド）：いとおしむ、大切にすること。神の「忠実さ」。→契約
「愛とは決して棄てないこと」
イザヤ書「女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか。母親が自分の産んだ子を憐れまないであろうか。たとえ、女達が忘れようとも、わたしがあなたを忘れることは決してない。見よ、わたしはあなたをわたしの手のひらに刻みつける。」（４９章１５−１６）
イザヤ書「山が移り、丘がゆらぐこともあろう。しかし、わたしの慈しみはあなたから移らずわたしの結ぶ平和の契約が揺らぐことはあいとあなたを憐れむ主は言われる」（54 章１０）
放蕩息子のたとえ（ルカ 15 章）、良きサマリア人（ルカ 10 章２９−３７）、ナインのやもめの息子　（ルカ７．１１−１７）

１．教皇フランシスコとテレーズ

（1）　イエス・キリストは、御父のいつくしみのみ顔です。キリスト者の信仰の神秘は、一言でいえばこの表現に尽きる気がします。（…）御子を見るものは父を見るのです。ナザレのイエスは、そのことばと行い、そして全人格を通して、神のいつくしみを明らかになさいます。
わたしたちはつねにいつくしみの神秘を観想しなければなりません。いつくしみは喜びの源、静けさと平和の泉です。いつくしみは、わたしたちの救いに不可欠です。（…）いつくしみ、それはわたしたちの罪という限界にもかかわらず、いつも愛されているという希望を心にもたらすもので、神と人とが一つになる道です。（大勅書 5-6 頁）

（２）教会は自らの第一の使命が、大きな希望と大きな矛盾に満ちたこの時代にこそ、キリストのみ顔を観想することで、神のいつくしみの偉大な神秘にだれもが入れるようにすることだと知っています。教会はいつくしみを告げ、イエス・キリストの啓示の中心としてそれを生きることによって、何よりもいつくしみの真の証人であるよう招かれています。（大勅書 44 頁）

（３）リジューの聖テレーズの模範は、私たちを愛の小さき道を歩むようにと招きます。それは、平和と友情を蒔くために、どんな小さな一言も、微笑みも、行為もないがしろにせず、大切にすることです。

（中略）互いの思いやりに満ちた小さな行いで成される愛もまた、社会的、政治的なものです。その愛は、より良き世界を作り上げようと努めるすべての行動のうちに現れるからです。（中略）それゆえ、教会は、世界に向けて『愛の文明』の理想を示したのです。」（ラウダト・シ）

２．テレーズと神の「いつくしみ」

（１） 神様は、私には無限の慈しみをくださいました。それで私はこの慈しみを通して、神様のほかのすべての完全さを眺め、礼拝します……！するとすべては愛に輝いて見え、正義さえも（たぶんほかの完全さよりもなおいっそう）愛に包まれているように思えます……。神様は正義そのもの、つまり私たちの弱さを斟酌なさり、人間本性のもろさを完全に知り尽くしておられると考えるのはなんと甘美な喜びでしょう！ですから何を恐れましょう？放蕩息子の過ちを、あれほどの慈しみをもってみなおゆるしになった、限りなく正義でおられる神さまは「いつも主とともにいる」（ルカ 15,31）私に対しても、正義でおられるのではないでしょうか。

（『幼いイエスの聖テレーズ自叙伝』p. 265、『わがテレーズ、愛の成長』p. 103）

（２）もし、神が正義にのみこだわるかたならば、神であることをやめることになるでしょう。そして、律法の遵守を主張するすべての人と同じくなってしまうはずです。正義だけでは足りません。正義にのみ訴えることが正義を台なしにしてしまう危険を伴っていることを、経験は教えています。だからこそ、神はいつくしみとゆるしを携えて正義を超えておられるのです。（大勅書 p.38）

３．テレーズとマリー・エウジェヌ師

「テレーズは初々しい幼子の目で、神とキリスト教を見て、そのまなざしで発見したことを、徹底的に、首尾一貫して実行、澄んだ、次いでそれを、これもまた子供らしい純真な心で単純に言い表したのである。彼女は偏見なしに、真理におもむき、その純粋さで本質を見分け、それを寛大さをもって完全に生き抜いた。こうして彼女は、本来の福音的教えの無傷な純粋さに、私たちを立ち返らせたのである。（『わがテレーズ』p.100）」

テレーズの霊性の根本：「憐れみの神についての観想的光」

神にとって人間の憎しみと冷淡は、自らをさらに与えたいという望みをかきたてる。そこでは正義と道理はもはや尺度とはならず、人間の必要性と神自らの（与えたい）という要求のみが尺度となる。このような愛をいつくしみと呼ぶ。テレーズが発見したのは、このいつくしみであった。（『わがテレーズ』p.107）

◎祈りとは、「自分が神から愛されていることを知りつつ、その神と二人だけで、たびたび語り合う親しい友としての交わりにほかなりません」（アビラの聖テレサ）

◎「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で、謙遜なものだから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。」（マタイ 11-28）

◎「人生の夕べにあなたは愛について裁かれるだろう」十字架の聖ヨハネ

講話の流れ

１．人間のうちにある愛への憧れ、この望みを満たすのは神のみ。

　人間の中に愛への渇きがあるのは、神が愛であることの証拠。のどが渇くというのは水があるという証拠であるように。この愛こそが、生きる力と希望、心の平和を与えてくれるもの。

２，　１神のいつくしみとあわれみ　説明

３．放蕩息子のたとえ　コピー

　父親殺しの話し、かかわりを切って忘れた人間→イスラエルの民の象徴、人類の象徴　、自分の自由に溺れて、神とのかかわりを忘れ、落ちるところまで落ちてしまった。

かみの憐れみ、

かみのいつくしみ、父はその愛に忠実でありつづける。

ゆるしとは、もう一度チャンスを与えること。うけた傷を忘れることではない。

４，教皇フランシスコとテレーズ

５　テレーズによるいつくしみの愛の再発見

　ジャンセニズムの時代、裁きの神の時代、ジャンセニズムの絵、救いはごく一部の人のもの。

　無神論の源泉となった神への恐れ。

　テレーズは、自分の人生のさまざまな出来事から、神がいつくしみの愛であることを確信してゆく。

　苦しみの人生のなかでの気づき。

６　テレーズとマリー・エウジェヌ師

祈りとは？　テレサとテレーズの祈りの定義

祈りの中で、あいである神を知らなければ、人々を愛することはできない。

子供がすべて母から学ぶように、母の心をもった父である神の心に触れることなく、憐れみと慈しみを学ぶことはできない。「互いに愛し合いなさい。私があなたがたを愛したように」

人生の夕べにあなたは愛について裁かれるだろう。

人生の価値は「愛したのか？」ということ。

我々の召し出し　VOCATION はすべて愛の召し出し。